

Title	近代日本における「読む」行為と人間形成：図書館における活動を視点として
Sub Title	
Author	山梨, あや(Yamanashi, Aya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.159- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化研究所)

——, 2005b 「台湾の地方祭祀にみる民俗的健康観—小琉球における王爺の迎王祭典の事例から—」『人間と社会の探求』第58号(慶應義塾大学社会学研究科紀要)

——, 2006 「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶穌教会を事例として—」『日本台湾学会報』第7号(日本台湾学会)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

近代日本における「読む」行為と人間形成

——図書館における活動を視点として——

山 梨 あ や*

本研究の概要

本研究の目的は、図書館における活動を視点として、女性が読書行為に参入する過程とその実態を明らかにすることである。平成16年度は、長野県飯田市における婦人文庫の設立過程と活動の変遷を明らかにすることにより、女性の読書行為への参入のあり方を検討する作業を行った。2004年9月18日に開催された日本社会教育学会においては、飯伊婦人文庫の設立から1960年代までを対象として、婦人文庫の活動の展開および当時の女性にとっての読書行為の意味について発表し、『日本社会教育学会紀要』第41号(2005年)に掲載されることとなった。以下、本年度の研究成果として上記学会の発表および論文の内容を要約する。

はじめに

長野県では、敗戦直後から地域の「民主化」を目指し、青年団や婦人会による学習・文化運動や公民館運動が展開された。読書(会)活動は学習活動の代表的なものであり、長野県では青年団や地域婦人会を主な担い手とする「読書会連絡会」とPTAを組織母体とする「PTA 母親文庫」の二系統の読書運動が展開された。本研究で検討する飯伊婦人文庫は両者の特徴を併せ持ちながらも、いずれの読書運動とも距離を保ちつつ独自の読書運動を展開しており、本研究で飯伊婦人文庫に注目する理由もここにある。

本研究では婦人文庫発行の文集『かざこし』(1959~71年)、『読書についての文集』(1962年~)を分析することにより、当時の女性の視点から読書という行為がどのように捉えられ、営まれていたのかを明らかにしていく。

1. 飯伊婦人文庫の設立

飯伊婦人文庫は、青年団、地域婦人会の活動、さらに公民館運動が結びついた結果設立されたものである。青年団のメンバーは公民館に働きかけて下伊那郡図書館協議会を結成させ、県立図書館および飯田市立図書館から配本を受けることに成功した。この結果、1957年に現在の飯伊婦人文庫の原型となる飯伊母親文庫および飯田婦人文庫が設立された。

両文庫の活動の方針を示し、実質的な運営の指導に当たったのが、1956年に竜丘村教育長・公民館

館長を退職した木下右治(1898~1976年)である。木下は「新しい時代に育つ青年の話相手、相談相手になれるだけの教養」、さらにマスコミが氾濫する中で雑多な情報に対する「批判力」を身につけるためには、読書をし、文章を綴ることが不可欠であると考えていた。

このような木下の読書に対する考え方は婦人文庫の活動のあり方にも反映されている。たとえば、「配本」という制度である。木下は、当時の農村の女性たちは半ば強制的に本が手元に届かない限り読書が困難であるとして、敢えて配本制度を導入している。このことから、木下は当時の女性たちが置かれた状況を踏まえ、既存の二系統の読書運動の長所を取り入れつつも、独自の読書運動を展開しようとしたといえよう。木下は、婦人文庫の設立当初から「読むことと書くことと話し合うこと」を活動の柱に据え、この方針の下で活動が展開されていくこととなった。

婦人文庫の活動内容は、①毎月一回の配本と、同時に開催される木下の「お話」、②文集の発行、③年一回の総会、④読書会の開催などである。中でも、文集の発行は婦人文庫の活動の重要な柱となり、婦人文庫創立二年後から『かざこし』が、十年後には『読書についての文集』が発行され、後者は現在に至っている。年一回の総会では、1960年より会員による発表が始まり、60年代後半には読後感想など個々人の「読み」、解釈が発表されるようになっていくことが特徴的である。また、読書会は当初木下の指導の下で行われていたが、徐々に会員が自発的に企画、実行していくこととなる。

2. 飯伊婦人文庫の活動の初期—1957~1961年—

婦人文庫の初期の文集において浮き彫りにされるのは、女性が読書をすることに對して否定的な考えが根強かったということである。女性たちは「近所の気兼ね、本家から誰かきはしないかなどと思いがら新聞さえも気楽に読むことができ」ない状況にあった。

このような状況の中で、女性を読書へと駆り立てたのは、時代に取り残されたくない、子供や夫の話相手、相談相手になりたいという意識であった。特に、子どもが自分自身の教育経験とはまったく異なる「新教育」を受け、自分にとっては未知の、新たな知識を身につけていくことは女性に大きな衝撃を与えたようである。婦人文庫は配本制度により、本を自由に買うだけの経済力のない女性に読書の機会を与えるとともに、読書を生活の中に取り戻す役割を果たした。

もっとも、婦人文庫の活動に参加したことによって、女性たちはすんなりと本を読めるようになったわけではない。女性たちは配本のたびに、文字の読み慣れなさを痛感している。しかしながら、女性たちは「今晚はここまで、あすはここまで、と計画的に読む」などの方法を自分なりに編み出し、徐々に読書習慣を形成していったのである。

3. 飯伊婦人文庫の活動の質的发展—1961~1970年—

婦人文庫の活動は女性たちに読書の機会を与え、読書習慣を形成することに寄与した。その一方、女性たちを取り巻く環境は1961年に起こった大水害、通称三六災害によって一変した。折から下伊那地方では兼業化が進行しつつあったが、災害の復旧作業には女性も駆り出され、復旧後も女性が「働きに出る」ことは常態化して、「パート」に出るようになる。女性のパートや内職による現金収入は消費生活に不可欠なものであり、結果的には女性の家庭内における地位を向上させることとなった。

ところが、女性は以前とは異なる多忙な生活を余儀なくされた。生活改善により、家事労働は軽減されたものの、「肉体労働が多く要求される結果となり、主婦の自由な時間は少しも浮いて」こなくなった

のである。この結果、女性の読書を妨げる理由はかつての家人（特に姑）に対する「気兼ね」から「多忙」へと変化していくこととなる。さらに、女性の読書を困難にしたのがテレビの登場であった。兼業化、内職やパートによる「多忙」、さらに読書に取ってかわるテレビの普及のあおりを受けて、婦人文庫の会員数は減少していった。

このような婦人文庫の会員数の減少について、婦人文庫は「望ましいことではないが、内容は順次充実していった」と評価している。婦人文庫が質的に充実したとする要因として、以下の3点が挙げられる。

第一点目は『読書についての文集』の発行である。この文集はそれまでの『かざこし』と異なり、読書に関する事柄だけを扱っている。このことは、会員がこの文集を編むに十分な読書習慣と読書力、さらに文章力を身につけていたことを裏付けるものである。

第二点目は、会員による自発的な活動の開始である。具体的には、会員による読書会の開催などが挙げられる。読書会における発表などは、女性にとっては慣れないものであり、戸惑いもあったが、仲間たちとともに勉強し、話し合うことによって得られる喜びも大きかったようである。これらの活動は、女性たちが「与えられた」読書から抜け出し、自発的な読書活動や学習活動を展開しようとしていたことの表れといえよう。

第三点目は、会員自身の読書に対する意識の変化である。婦人文庫が活動を開始した当初、女性たちが読書に取り組んだのは「時代に取り残されたくない」という意識によるところが大きかった。しかしながら、読書会への参加を通して「自分のように読まない方が幾人もいらっしゃる、又同じ悩みを持っていることが色々と分かって」来ると、読書が自分自身の人生に重要な意味を持つことが自覚されることとなった。

女性たちは、読書の時間が少なくなる中で、改めて読書の必要性を捉え返している。たとえば、文集には、テレビ番組に自分の時間を流されてしまうことに違和感を覚えるが、読書はゆっくりと様々な問題を考える時間を与えてくれるという意見が綴られている。さらに女性たちには、「教養が身についたかどうか」などの利益は度外視して、読書そのものに意味を見出そうとする姿勢が見られるようになる。

さらに、「私は（中略）、なんとしても一人でも多くの方たちと知りあい、共に読み、聞き、書き、言い、そして私の考えを一步でも進めたい」という文章にもあるように、女性たちの中には強烈的な進歩への意志が芽生えつつあった。ここで見逃すことができないのは、女性たちは婦人文庫の様々な活動を通して、共同で学習することの重要性を認識し始めていることである。「進歩」への意識に目覚め、自分自身のために学ぶことを考え始めた女性たちにとって、読書という行為、さらにそれを共同で行うことは、自分自身の考えを整理するとともに、それを主張する手がかりとなるものであったといえる。

おわりに

敗戦後に学習・文化運動が高まりを見せる中、女性たちはこれらの活動から疎外されていた。このような中で女性たちに読書の機会を提供し、新たな活動へのスプリングボードとしての役割を果たしたのが婦人文庫の活動であったといえよう。女性たちは「時代に取り残されたくない」という意識に突き動かされ、徐々に読書習慣を形成していった。

しかしながら、三六災害前後からの女性の社会進出、テレビの普及は女性の生活を一変させる。この過程で女性が読書をできない理由は、家人への「気兼ね」から「多忙」へと変化していった。この結果、

婦人文庫の会員数は減少していくが、読書が続けた女性たちが存在したことも事実である。女性たちは婦人文庫の活動を通して読書習慣を身につけ、共同で学習することに積極的な意味を見出すようになってきている。女性たちの読書に対する姿勢は、かつての時代に遅れずについていくという他律的なものから、「利益」を度外視し、読書をしたいという意志に基づいてそれを実行するという自律的なものへと変化しているといえよう。

そしてこのような自律的な読書が成立した背景には、婦人文庫における集団的な読書活動がある。女性たちは婦人文庫の活動を通して自分と同じような境遇にあり、悩みを共有する仲間と出会うことで、読書行為に参入していった。ゆえに、女性たちにとって読書という行為は自分自身と周囲の状況を媒介するとともに、自分の考えを再確認し、外界に向けて発信していく核となるものであったのである。

なお、本研究では戦前の読書活動との連続性や 1970 年代以降の活動のあり方に関しては明らかにすることができなかった。これらの問題に関しては今後の課題としたい。

謝辞：本研究の調査に際しては、飯伊婦人文庫の方々、松澤太郎・緑氏、今村兼義氏、および飯田市立中央図書館の方々に多大なご協力をいただいた。ここに改めて感謝申し上げます。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

対人ストレス過程における個人差の検討

——拒否に対する感受性に着目して——

小 川 万 理 子*

対人関係にまつわるストレスフルなイベント（対人ストレッサー；口論など）は健康状態にとりわけ大きな悪影響を及ぼすことが知られているが、どの程度ストレス反応（健康度の低下）を呈するかには個人差がある。本稿では、拒否に対する感受性 (rejection sensitivity; RS) の高い者が何故高いストレス反応性を示すのかについて、ストレスコーピングとの関連から検討する。

RS とは、拒否されると不安を伴って予期し、また拒否をすぐに知覚して過剰反応しやすい傾性をさす (Downey & Feldman, 1996)。Downey らはこのうち、拒否についての予期とそれに伴う不安・懸念が RS の中核であるとし、両者を測定する尺度 (Rejection Sensitivity Questionnaire; RSQ) を開発した。すなわち、両親・友人・恋人といった重要他者から拒否されると予期し、なおかつそれについて不安を強く感じやすい者が RS の高い者 (HRS) とみなされる。

RS が対人関係での経験や、この経験による健康状態の変化に影響することが RSQ を用いた研究から示されてきた。まず RS と対人ストレッサーの経験については、RS の高さが恋人との破局 (Downey, Freitas, Michaelis, & Khouri, 1998) や暴力を伴う葛藤 (Purdie & Downey, 2000) の経験に結びつくことが示されている。そして健康状態への影響について、Ayduk, Downey, & Kim (2001) は、恋人に別れを切り出された場合が高ストレス、自分から切り出すか円満に別れるか、あるいは関係が継続している場合が低ストレスとみなして検証し、HRS ほど高ストレスの経験によって抑うつを増加させることを示している。同様の傾向は、我が国の大学生についても明らかにされている。HRS ほど対人ストレッ